

- [分類] 普及技術
- [成果名] モモ炭疽病防除にフリントフロアブルが有効である
- [要約] モモ炭疽病防除にフリントフロアブルの2,000倍液を散布する。
- [担当] 果樹試験場環境部
- [部会] 病虫部会

### 1 背景・ねらい

モモ炭疽病は直接果実に被害を及ぼす病害であり近年問題になっている。現在、本病に対する登録薬剤がないことから平成20年より試験を実施し、平成22年10月に適用拡大となったため、今回普及技術とした。

### 2 成果の内容・特徴

- (1) モモ炭疽病防除にフリントフロアブルの2,000倍液を散布する。

#### 農薬登録内容

##### フリントフロアブル

- [一般名および成分含有量] トリフロキシストロピン 25.0%
- [毒性] 人畜毒性：普通物 [魚毒性] C類
- [対象作物に対する適用登録状況（平成23年1月15日JPP-NET確認）]

作物名	適用病害名	希釈倍数	使用液量	使用時期	本剤及びトリフロキシストロピンを含む農薬の総使用回数	使用方法
もも	黒星病 炭疽病 灰星病 ホモプシス腐敗病	2,000倍	200～700 /10a	収穫前日 まで	3回以内	散布

本試験は純粋に殺菌剤の効果を判定する目的のため、また、適用登録内容が決定される以前に実施したため、散布回数は適用登録の回数を超えた。

### 3 利用上の留意点

- (1) モモ炭疽病はりんごと同様にニセアカシアの炭疽病が伝染源となっているものと考えられるため、河川敷などニセアカシア樹のある付近に隣接するほ場では注意する。
- (2) 水産動植物に強い影響を及ぼすので、河川、沼地および養殖池に飛散、流入するおそれのある場所では使用しない。
- (3) 蚕に対して影響があるので、桑葉にかからないように注意する。
- (4) 本剤はストロビルリン系薬剤であり、耐性菌の出現を防ぐため多用、連用を避ける。
- (5) 6月上旬までの日本なしにかかるると薬害の恐れがあるので注意する。また西洋なし（有袋栽培）の袋かけ直前まで果実のサビ症状を助長する恐れがあるので注意する。
- (6) おうとうの未展開葉に奇形が生じる恐れがあるので注意する。

#### 4 対象範囲

県下全域

#### 5 具体的データ

##### (1) モモ炭疽病に対する防除効果

平成20年から22年に果樹試験場内において試験した。フリントフロアブルのモモ炭疽病に対する防除効果は、無散布と比較して高い効果が認められた。

##### (2) 薬害は認められなかった。

表1 モモ炭疽病に対するフリントフロアブルの防除効果 (平成20年、果樹試験場)

供試薬剤	希釈倍数	調査果数	発病果率(%)		防除価 <sup>1</sup>	薬害
			収穫時	貯蔵後 (累計)		
フリントフロアブル	2,000	64.3	2.7	2.7	94.0	なし
無散布		51.7	21.4	45.2		

<sup>1</sup> 防除価 =  $100 - (\text{散布区の発病果率} / \text{無散布区の発病果率}) \times 100$

果樹試験場内の「川中島白桃」(無袋栽培 10 年生)を用いて平成 20 年 6 月 17 日、7 月 1 日、15 日の 3 回、動力噴霧機により 45 / 3 樹の割合で供試薬剤を散布した。展着剤(アグラー)を 10,000 倍で加用した。処理前後に降雨はなかった。

8 月 26 日に全果収穫し、発病の有無を調査した。収穫時健全果を 24 で保存し、9 月 1 日まで随時発病を調査し、発病果率を算出した。薬害は散布時及び調査時に肉眼によって行った。

平成 20 年 6 月 23 日、7 月 8 日、23 日の 3 回降雨に併せて約  $1 \times 10^5$  個 / m<sup>2</sup> に調整したモモ炭疽病菌 *Colletotrichum acutatum*(以下 *C.a*)、*C.gloeosporioides*(以下 *C.g*)の混合の孢子懸濁液を背負い式動力噴霧機を用いて全樹へ 20 / 15 樹散布した。灰星病防除のため 7 月 30 日、8 月 12 日、20 日にロブラール水和剤 1,500 倍液を 15 樹全樹に散布した。そのため無散布区は炭疽病に対しての無散布である。

表2 モモ炭疽病に対するフリントフロアブルの防除効果 (平成 21 年、果樹試験場)

供試薬剤	希釈倍数	調査果数	発病果率(%)	防除価 <sup>1</sup>	薬害
フリントフロアブル	2,000	132.0	8.3	87.1	なし
無散布		129.7	64.1		

<sup>1</sup> 防除価 =  $100 - (\text{散布区の発病果率} / \text{無散布区の発病果率}) \times 100$

果樹試験場の「川中島白桃」(無袋栽培 11 年生)を用いて平成 21 年 6 月 10 日、23 日、7 月 7 日、24 日の 4 回動力噴霧機により 45 / 3 樹の割合で供試薬剤を散布した。展着剤(アグラー)を 10,000 倍で加用した。処理前後に降雨はなかった。

8 月 17 日から樹上発病果を調査し除去した。8 月 27 日に全果収穫し、発病の有無を調査し、8 月 17 日以降除去した収穫果と併せ、発病果率を算出した。薬害は散布時及び調査時に肉眼によって行った。

平成 21 年 6 月 16 日、22 日、7 月 8 日、27 日の 4 回降雨に併せて約  $1 \times 10^5$  個 / m<sup>2</sup> に調整した当該保存のモモ炭疽病菌 (*C.a*、*C.g*)の混合の孢子懸濁液を背負い式動力噴霧機を用いて全樹へ 20 / 15 樹散布した。灰星病防除のため 8 月 5 日にはサンリット水和剤 2,000 倍液、19 日にはロブラール水和剤 1,500 倍液を 15 樹全樹に散布した。そのため無散布区は炭疽病に対しての無散布である。

表3 モモ炭疽病に対するフリントフロアブル防除効果 (平成22年、果樹試験場)

供試薬剤	希釈倍数	調査果数	発病果率(%)	防除価 <sup>1</sup>	薬害
フリントフロアブル	2,000	110.7	0.9	90.6	なし
無散布		144.7	9.6		

1 防除価 =  $100 - (\text{散布区の発病果率} / \text{無散布区の発病果率}) \times 100$

果樹試験場内の「川中島白桃」(無袋栽培12年生)を用いて平成22年6月17日、30日、7月14日の3回動力噴霧機により60/3樹の割合で供試薬剤を散布した。展着剤は加用しなかった。処理前後に降雨はなかった。

7月27日から樹上発病果を毎週1回調査し除去した。8月31日に全果収穫し、発病の有無を調査し、8月17日以降除去した収穫果と併せ発病果率を算出した。収穫時健全果を25で保存し、9月10日まで随時発病を調査し、発病果率を算出した。薬害は散布時及び調査時に肉眼によって調査した。

6月15日に、場内で発生したモモ炭疽病罹病果から調整した胞子(*C.a*)懸濁液( $1 \times 10^4$ 個/m)を動力噴霧機で全体へ均一に80/14樹散布した。

## 6 特記事項

[公開] 制限なし。

[課題名、研究期間、予算区分]果樹の新規農薬等の効果試験、平成20～22年度(2008～2010年度)、民間受託